



Title	English Track日本語プログラムにおけるレベル妥当性の検証 -日本語能力試験模擬試験とCan-do statements調査の結果から-
Author(s)	柳澤, 絵美, 小森, 和子, 菊池, 富美子, 渡辺, 晴世, 岩元, 隆一, 安高, 紀子, 奥原, 淳子
Citation	明治大学国際日本学研究, 10(1): 139-167
URL	http://hdl.handle.net/10291/20659
Rights	
Issue Date	2018-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

【研究ノート】

English Track 日本語プログラムにおけるレベル妥当性の検証

－日本語能力試験模擬試験と Can-do statements 調査の結果から－

Validation Study in English Track Japanese Program Courses:
Using the Result of JLPT Practice Test and the Can-Do Statements Survey

柳澤 絵美

YANAGISAWA, Emi

小森 和子

KOMORI, Kazuko

菊池 富美子

KIKUCHI, Fumiko

渡辺 晴世

WATANABE, Haruyo

岩元 隆一

IWAMOTO, Ryuichi

安高 紀子

ATAKA, Noriko

奥原 淳子

OKUHARA, Junko

I はじめに

近年、日本国内の大学の国際化が進められている。本学もその一環として、2011年度から、英語で開講される科目の履修のみで学位を取得できる English Track (以下, ET) が開設された。

国際日本学部 (以下, 本学部) では, ET 開設に伴い, ET 所属の学生 (以下, ET 生) 対象の日本語科目として, 「Introductory Japanese」 (以下, 「入門日本語」) と「初級日本語」を新たに設置した。2016年度には, 中級入門, 中級, 中上級, 上級入門の4レベルを加え, ET 開設以前から設置されていた上級の日本語科目とあわせて, 現在は全7レベルで日本語の授業を行っている。本稿では, 7レベルの内, 「入門日本語」～「上級入門日本語」までの6レベルの日本語科目 (以下, ET 日本語) について述べる。

本論文では、まず、ET日本語の学習目標と各レベル終了時のJLPT到達レベルの目安について述べ、2017年度春学期に実施した授業内容について報告する。そして、JLPTの公式問題集を用いた模擬試験の結果と、JLPTのCan-do自己評価リスト（以下、JLPT-CDs）に示されているCan-do statements（以下、CDs）を用いた自己評価の分析から、ET日本語履修後の学生の日本語力が設定した到達目標に達したか、また、ET日本語のレベル設定が妥当だったかについて検証する。

II ET日本語の構成とコースの到達目標

ET日本語は、当該レベルの文法を学び、聞く、話す、読む、書くの4技能を総合的に使った日本語能力を養成する「総合」（週3コマ）と、語彙と漢字の学習に特化した「語彙・漢字」（週1コマ）の、2科目週4コマで構成されている。全6レベルの科目構成は同じだが、入門や初級などでは、文法や語彙などの言語知識の学習を中心とし、中上級や上級入門などでは、課題遂行型のプロジェクトワークも実施している。各レベルの詳細については、柳澤他（2017）を参照されたい。

ET日本語の6レベルに共通する学習目標は、(1)日本語の言語知識（語彙・文法的知識、語用論的知識、談話的知識、方略的知識等）と日本語による課題遂行能力を獲得すること、(2)日本語を学びながら、学んだ日本語を使って、日本語で提供されている多様なリソースに自律的にアクセスし、日本の社会文化に関する知識を獲得し、その理解を深めること、(3)日本の社会文化に関する知識を得る過程で、学習者の出身国や地域、その他の国や地域の事情と比較、検討することにより、客観的に世界を見つめ、評価する能力を養い、そこで得た知見をそれぞれのレベルの日本語で発信できるようになることである。

ET日本語では、CDsの形式で各レベルの学期終了時の到達目標を設定し、各レベル終了後のJLPTのレベルも目安として提示している。前者の到達目標については、柳澤他（2017）を参照されたい。後者の到達レベルの目安は、入門はN5合格程度、初級はN4合格程度、中級入門はN3半分終了程度、中級はN3合格程度、中上級はN2半分終了程度、上級入門はN2合格程度である。

III 実施報告

ここでは、2017年度春学期にET日本語で行われた授業の内容、学生からの感想や要望、および、今後の課題について「総合」と「語彙・漢字」に分けて報告する。

まず、各授業の基本情報を表1に示す。

表1 ET 日本語のレベル・教科書・履修者

レベル	教科書	履修者 (人数)
入門日本語 (総合)	『初級日本語 げんき I (第2版)』 (The Japan Times)	中国 (7), スウェーデン (1), ノルウェー (1)
入門日本語 (語彙・漢字)	『(新版) Basic Kanji Book vol.1 基本漢字 500』(凡人社)	
初級日本語 (総合)	『初級日本語 げんき II (第2版)』 (The Japan Times)	アメリカ (3), 台湾 (3), スイス (2), 韓国 (1), フィリピン (1), 中国 (1), フランス (1), ドイツ (1)
初級日本語 (語彙・漢字)	『(新版) Basic Kanji Book vol.1 基本漢字 500』(凡人社)	
中級入門日本語 (総合)	『中級へ行こう 日本語の文型と表現 56 (第2版)』(スリーエーネットワーク)	アメリカ (7), 中国 (3), オーストラリア (2), フランス (1), シリア (1), ベトナム (1), タイ (1), フィリピン (1)
中級入門日本語 (語彙・漢字)	『(新版) Basic Kanji Book Vol. 2 - 基本漢字 500 -』(凡人社)	
中級日本語 (総合)	『中級を学ぼう 日本語の文型と表現 56 中級前期』(スリーエーネットワーク)	アメリカ (3), 中国 (3), イギリス (2), オーストラリア (1), ベトナム (1), 台湾 (1), フランス (1)
中級日本語 (語彙・漢字)	『(新版) Basic Kanji Book Vol. 2 - 基本漢字 500 -』(凡人社)	
中上級日本語 (総合)	『中級日本語教科書わたしの見つけた 日本』(東京大学出版会)	アメリカ (3), 中国・香港 (3), 台湾 (1), ベトナム (1), ドイツ (1), オーストリア (1), フランス (1)
中上級日本語 (語彙・漢字)	『Intermediate Kanji Book Vol.1 - 漢字 1000 Plus - (改定第3版)』(凡人社)	
上級入門日本語 (総合)	『中・上級日本語教科書 日本への招待 テキスト (第2版)』(東京大学出版)	台湾 (2), インドネシア (1), オーストラリア (1), カナダ (1), セルビア (1), 中国 (1), フランス (1), ベトナム (1), 香港 (1)
上級入門日本語 (語彙・漢字)	『Intermediate Kanji Book vol.2改訂版』 (凡人社)	

1. 入門日本語

1-1. 総合

(1) 授業の内容

12課あるテキストの各課を約3回の授業で学び、復習の時間も挿入した。各課の学習は、新出語彙と文法事項は予習とし、授業は、予習の確認と口頭練習を中心に行った。更に、その日の学習項目は宿題としてワークブックで復習し、次回の授業で提出する形で進めたが、ワークブックは、読み書きの練習の役割も担った。

習得度の確認や評価は、日常的には、宿題のチェック、各課の初回に実施した新出語彙クイズ、各課終了後に実施した文法クイズで行い、他に、中間試験と期末試験によって評価した。

(2) プロジェクトワーク・活動

特になし。

(3) 学生の声

学期末の時点で、「もっと宿題がほしい」という意見が複数あった。毎回、平均して4～5ページのワークブックの問題を宿題とし、授業日の2日に1回は語彙の事前学習を課したため、宿題が少ないとは思わなかったが、こうした意見は今期の学生の学習意欲の高さを反映したものである。一方で、「課ごとに学習内容の難易度が違うので、時々進むのが速いと感じた」という学生もいた。また、「教科書で学ぶフォーマルな知識以外に日常的な日本語の練習がもっとあると良い」という意見もあった。これは、授業時間が足りずに、ロールプレイなどのまとめの活動を削ることが度々あったことにも依ると思われる。

(4) 今後の課題

今学期は中国圏出身の学生7名と欧州出身の学生2名という構成だったが、いずれも日本語の文法を分析的、体系的に理解しようとする学生の比率が高かった。そのため、既習の文法項目との関連づけや、既習項目との違いの説明を求められ、新規の文法項目の導入に時間がかかることがあった。このような学生は、初めに、助詞の働きや動詞の活用といった日本語文法の概要を知ってから学び始める方が、新しい文法を学ぶ度に困惑せずに済むと思われる。来学期は、このような混乱を避けるため、コース開始時に日本語文法の概要と学習の留意点を示す機会を設けたい。

また、自宅でより多くの練習をしたいという学生や、日常的な会話に触れたいという学生に対応するために、聴解練習も宿題に含めようと思う。

1-2. 語彙・漢字

(1) 授業の内容

授業の最初にディクテーション・読み・書きの3つで構成された復習クイズを実施した。次に、学習漢字をパワーポイントで示し、漢字の読みと意味を確認した。そして、教師が黒板に漢字の書き順を示し、学生はミニホワイトボードにその漢字を書いて、字形と書き順の確認・練習を行った。その後、プリントなどで漢字の読み方と意味を復習した後、教科書の練習問題に取り組んだ。練習問題の書きの部分では、学生に割り当てられた漢字を黒板に書かせて、漢字の形や画数などについてクラス全体で確認した。最後に、その日に勉強した漢字の定着を図るための宿題を出した。また、時間に余裕があれば、学習した漢字を使って、総合クラスで導入した文法の復習（活用の練習やフォームの確認など）も行った。

(2) プロジェクトワーク・活動

2017年度春学期は、ET日本語全レベルの語彙・漢字クラスで学生が興味を持った漢字を自由に選んで筆ペンで書き、その漢字を選んだ理由についても日本語で書く活動を「漢字プロジェクト」として実施した。そして、活動の成果物は冊子としてまとめ、学生に配布するとともに、8月に行われた中野キャンパスのオープン・キャンパスで展示・公開した。「漢字プロジェクト」の詳細は、Ⅲ-7で後述する。

(3) 学生の声

非漢字圏の学生2名は、ゼロ初級であったため、毎週12～15字程度の新出漢字と、その漢字を使った語を覚えるのに時間と労力がかかり大変だったという声が聞かれた。一方、漢字圏の学生からは、漢字自体は知っているものも多かったため、もう少し発展的な練習や課題にも取り組んでみたかったという希望が出された。

(4) 今後の課題

漢字圏と非漢字圏の学生が混在するクラスで、非漢字圏の学生には、入門レベルで学習すべき漢字と語彙がしっかりと定着し、漢字圏の学生にも簡単すぎず、ある程度の達成感が得られる授業を実施していくことが課題として挙げられる。

2. 初級日本語

2-1. 総合

(1) 授業の内容

各課でその課の予習をかねた語彙クイズを実施し、その後、新出語彙の意味を確認した。次に提出されている文法の用法を説明し、教科書の文型練習やペアワークなどのクラス活動に取り組み、必要に応じて自作のプリントを配布し、理解を深める一助とした。また、付属のワークブックを宿題として提出させ、文法事項の定着を図った。各課を終えてから、まとめとして、毎回、文法復習クイズを行った。

(2) プロジェクトワーク・活動

① 日本人家庭への訪問

教科書の後半で扱う敬語表現を実際に使用する機会を設けるため、日本人の家庭を訪問した。その際、一人ずつ事前に用意した敬語表現を含む挨拶と質問をインタビュー形式で行い、年長者との敬語を交えた会話を体験した。また、茶道や書道のいろはを体験することで日本文化に直接触れる絶好の機会となった。

② 七夕の短冊作り

七夕の日が学期中であったため、教科書の七夕についての説明を読み、短冊に自分の願い事を書き、教室のブラインドに下げて、七夕の雰囲気を感じられるように努めた。

③ 風呂敷ワークショップ

風呂敷に造詣の深い大学のスタッフによる様々な形状のもの(本、ボール、瓶など)の風呂敷を使用した包み方のワークショップを行った。風呂敷の歴史や模様や名称とその意味などについても知ることができ、事後のアンケートを見ても意義深いものとなったようである。

(3) 学生の声

教室での授業以外にも色々と有意義な活動を行うことができたという声が多かった。ただ、既にある程度まで自分の国で日本語を学習してきた学生からは進度をもう少し早めてほしいという声もあった。

(4) 今後の課題

今学期より授業時間が100分になったため、途中で集中力が落ちてしまう学生が見られた。習得のペースや興味が異なる学生に集中力を持続させるために、教科書以外の新聞、雑誌、ビデオなどの活用も検討したい。

2-2. 語彙・漢字

(1) 授業の内容

最初の5分程度で、前回導入した漢字のクイズ（読み、書き）を実施した。次に、パワーポイントのスライドを用いて、新出漢字の読み、意味、当該漢字を用いた漢字語を示した。また、既習漢字で当該漢字と形態の近似している漢字があれば、その漢字も示した。その後、各漢字の書き方を黒板で示し、学生はその漢字を書く練習を行った。書き練習の間、教師と2名の日本人学生のボランティアが机間巡視を行い、必要に応じて個別指導を行った。その後、再度、最初に見せたパワーポイントで読み、意味、書きについて疑問点がないか確認した。更に、当該漢字を含む漢字語を混入させた例文をスライドで見せて、漢字が読めるか、意味が理解できるかを確認し、当該漢字語の文法的働き、共起語、用法などについて意識させた。最後に、2名の日本人学生のボランティアを中心に、15分程度の漢字ゲームを行い、漢字の定着を図った（詳細は(2)）。

(2) プロジェクトワーク・活動

日本人学生2名にボランティアとして毎回クラスに来てもらい、学生の漢字学習の補助をしてもらった。

2名のボランティアには二つの作業を依頼した。一つは、学生が漢字の書き練習をしている間、机間巡視をし、漢字の形態チェックや質問対応をする作業である。もう一つは、授業の最後に行う漢字ゲームの準備と実施である。漢字ゲームは、その日の導入漢字の定着につながるものをボランティアが考案し、実施した。ゲームの内容は毎回異なるが、例えば、カードの表面に漢字語を書き、裏面に読みや意味を書いて、カードを机にランダムに並べてから、ボランティアが漢字語を読み上げ、学生にその漢字語が書かれているカードを取らせたり、取った漢字カードの意味を言わせたりした。

漢字クラスは、初級レベルでは書き取り練習などの個人作業が多くなりがちだが、日本人学生が授業に参加したことで、学生は日本語を話しながら学ぶことができ、有効であった。また、漢字ゲームを行うことで楽しみながら漢字学習を進めることができていた。特に、漢字に抵抗感のあった欧米系の学生には、教師が行う授業より日本人学生と行う漢字ゲームに熱心に参加する者もいた。

(3) 学生の声

一般に、漢字の学習は個人差が大きく、文法や読解の知識が不十分でも漢字の学習を好む学生がいる一方で、漢字に強い拒否反応を示す者もいる。更に、非漢字圏学生のペースで授業を行うと、漢字圏学生が退屈してしまうこともある。しかし、今回、授業の最後に漢字ゲームを取り入れた

ことで、漢字圏学生と非漢字圏学生が協力したり、競い合ったりしながら、ともに漢字学習を進めることができよかつたという声がかれた。また、日本人学生がクラスに入ることで、日本語を話す機会が増えてよかつたという声もあつた。その一方で、習つた漢字語が含まれる文章を読んだり、関連するテーマで作文を書いたりしたい、という声も聞かれた。

(4) 今後の課題

一回の授業で導入される漢字の数が、漢字圏学生には少なく、非漢字圏学生には多く感じられているようだ。学生の背景に柔軟に対応できるような漢字の授業を、どのように組み立てるべきか、今後も模索と検討を続けていきたい。

3. 中級入門日本語

3-1. 総合

(1) 授業の内容

語彙学習は予習項目として、各課に入る前に語彙クイズを実施した。10課構成の教科書の各課を、①文法項目、②本文の読解・聴解、③既出文法の整理の3コマに分けて進めた。①文法項目の授業では、パワーポイントでその表現が使われる場面や発話者の心情などを視覚化することで意味・用法の理解を促し、適切な文が作れるよう練習した。授業後には、文法項目の定着を図るための文法復習プリントを宿題として課した。②本文に関連した授業では、本文で扱っている話題について話し合う活動の後、本文の聴解で大まかな内容を掴ませ、本文を読んで語彙や内容に関する細かい理解を確認した。授業後には、文章展開のスキルアップを目指し、本文に関連した内容、展開で200字～300字の作文を宿題として書かせた。③既出文法の整理では、当該文法が用いられる場面や例文を提示し、文法項目の意味・用法を復習した後、練習問題を行い、定着を図つた。この他に、これまでに学習した言語知識を用い、ある程度まとまつた長さの談話を産出する練習として、スピーチ作成（「私の国の食べ物」「私の国と日本の違い」）、発表を2回、また、グループで日本人学生に対してアンケート調査を実施し、発表を行った。

習熟度のチェックは、課ごとに語彙と文法の復習クイズを実施し、学期の中間・期末に、それまでの学習内容の復習とまとめの試験を実施した。

(2) プロジェクトワーク・活動

学期の中間で行つた浴衣ワークショップでは、ひもで浴衣の長さを調節する、平らにたためるなど、浴衣がシンプルな作りであることを知つたり、下駄で歩く難しさを体感したりできた。また、学期末には、「私の国の食べ物」というテーマで自国の代表的な料理を紹介する壁新聞を制作した。

(3) 学生の声

学生数が18名と大人数のクラスだったため、能力レベルの差やニーズの違いが大きく、「難しかった」「学習内容が多すぎた」という声と、「授業の進度が遅い」「もっと勉強したかった」という、両方の声がかれた。難易度は適当だったという学生でも、「スピーチの練習が良かった」という意見と、「スピーチより会話のほうがいい」など異なる意見があつた。比較的よかつた意見は、

一日に2コマ続けて授業が行われることに対するもので、「集中し続けるのが難しい」「一度に覚えきれない」などの声があった。

(4) 今後の課題

初級までに学んだ文法や語彙は基本的なものであり、それぞれの意味や用法の違いが明確であったが、中級入門では、伝達する情報としての意味は同じでも話者の視点や心情が異なる、使う場面が異なる表現を学ぶ。それと同時に、文から談話／対話へと、ある程度まとまった内容の伝達／やりとりができるようになるための、最初の段階でもある。この点を中心に授業の組み立てを行ったが、例えば、本文に関連した作文は宿題でしか扱わなかったために、文章展開の学習としては不十分だった。学生の能力差も視野に入れて、このレベルに相応しい学習を更に見極めるべく、多様な指導を試みる必要がある。

3-2. 語彙・漢字

(1) 授業の内容

授業では、最初に前回の授業で学習した漢字の読み、書き、ディクテーションの復習クイズを実施した。次に、その日学習する漢字のテーマに関連する情報を提示した。そして、新しく学習する漢字・語彙の読みや意味をパワーポイントやプリントを用いて確認した。また、筆順や字形のバランスにも注意を払わせるため、A4サイズのボードに漢字を書き、ペアでチェックする活動も行った。

(2) プロジェクトワーク・活動

語彙マップ（以下、マップ）の作成を行った。「私」というテーマで、自分の趣味などに関する語彙を調べ、マップに記入した。辞書で調べた新しい語彙は、その語彙の漢字、読み、意味をリストに記入し、語彙リストも作成した。

マップの作成は宿題とし、授業ではマップを使ったペアワークを2回、その後、完成したマップの発表を行った。ペアワークでは、話し手が自分のマップについて説明し、聞き手は説明が足りない点などを話し手にフィードバックし、それぞれマップの修正を行った。発表では、自分のマップについて、ポスター発表形式で3、4回説明を行った。

(3) 学生の声

漢字に興味を持ち、学習意欲が高く、楽しんで学習に取り組んでいる学生がいる一方、漢字圏出身の学生からはクラスで学習する必要性を感じないとのコメントもあった。

(4) 今後の課題

今後は、授業で行う漢字の読み書き練習とのバランスをとり、読み物にも取り組めるようにし、学習した漢字の定着を図りたい。

4. 中級日本語

4-1. 総合

(1) 授業の内容

このコースでは、前半（第1週～第7週）は教科書1～4課を、後半（第8週～第14週）は教科書5～8課と「国の文化紹介」の活動を行った。

教科書は1つの課が終わるごとに語彙と文法のクイズを行った。また、書き言葉に慣れるように、課に関連したテーマで追加の読み物を読んだ。読み物は、中級文法を使って日本の生活文化について書かれた平易な説明文を扱った。その他の内容として、グラフの説明、物の仕組みの説明、短いプレゼンテーション、JLPT N3の文法練習などがある。

コース開始時の学生の学習状況から、「身近な事柄について、複文やまとまった長さの談話を用いて分かりやすく説明すること」、「受身文や助詞相当句など初級後半から中級前半の文法を効果的に使うこと」、「語彙を広げること」が特に必要と思われた。授業では、よく知っている事柄や自らの経験を軸に、ある程度の長さをもった日本語を産出する練習を行った。

(2) プロジェクトワーク・活動

コースの後半に、国の文化を紹介する活動を行った。実施目的は、出身地の文化について口頭と作文で短い発表をすること、聞き手や読み手を意識して作文や資料を構成すること、フォーマルな文体を使って発表をすることである。4コマを当て、以下の方法で行った。

①発表原稿となる作文を書く。テーマは以下の4つから1つ選び、400～800字以内で書く。

また、写真も2～3枚用意する。

- A 国の大学（学生生活）紹介 B 国の伝統文化紹介
C 国で最近人気／話題のもの D 国から日本へ／日本から国へ伝わったもの

②壁にはった写真を見せながら、日本人学生の前で発表する。発表はポスターツアーのように小グループで数か所を回る形で行う。発表のあとは自由に質疑応答をする。

③作文を日本語と母語の2か国語でタイプする。

④発表時に使った写真と作文を合わせてグループでポスターを作成する。

②の発表会では、口頭発表の機会が3回あったため、必要な説明を加えたりプロミネンスをつけたりといった、聞き手を意識した表現の調整を行うことができていた。また、ポスターツアー方式にしたことで、留学生も日本人学生もリラックスして会話できたようであった。④のポスターは、印刷した作文をそのまま貼ったために字が小さく読みにくかった。今後は小冊子やWebサイト記事にまとめることを検討したい。

(3) 学生の声

全体的に、「会話ができるようになりたい」「これまで習った文法を使えるようになりたい」という希望を持つ学生が多かった。他に、将来のために敬語を習いたい、日本語で開講されている授業を取るためにレポートの書き方を学びたい、口頭発表の力をつけたいなどの声も聞かれた。

授業の進度と教科書の難易度については、ちょうどいいという者ともっと速く難しい方がいいという者とが半々ぐらいであった。日本語力が低めの学生からは、文法説明に英訳がほしい、新出語が多くて大変だという声があった。教養講座の授業を取った学生、日常生活でホストファミリーや日本人学生とよく接している学生は、リスニングや話すことに大分慣れたようだ。一方、「留学で一気に上達すると思っていたが予想したほど伸びなかった」「中級文法は使い方が合っているかどうか自分で判断しにくい」という声もあり、中級の壁を感じている様子も見られた。

(4) 今後の課題

学生の間で特に口頭の産出面でレベルに差が見られるため、平易な文を声に出す機会や簡単な会話をする練習の時間を多くとりたい。初級後半の文法項目や単文と複文をバランスよく組み合わせさせて話すことについては、色々なタスクを通して繰り返し練習する必要があると考えている。また、中級入門レベルとの段階付けを、語彙の面と産出の面から検討したい。特に非漢字圏の学生にとって、教科書に出てくる語彙は難しく、このレベルで必要な基本的な語が抜け落ちている可能性がある。説明文を読んだり生活で話したりするために必要な語彙・文法を整理していきたい。

4-2. 語彙・漢字

(1) 授業の内容

最初に、前回の授業で学習した漢字の読み、書き、ディクテーションの復習クイズを実施した。次に、その日学習する漢字のテーマに関連する画像や情報を示し、ウォーミングアップを行った。そして、新しく学習する漢字・語彙について、意味、読み、用法などをパワーポイントやプリントを用いて確認した。語彙は同意語や対義語なども取り上げ、語彙の知識を増やすように努めた。また、その語と共起する語や特定の助詞などがある場合は、語単独ではなく、文の中でも使えるよう、短文を提示した。

(2) プロジェクトワーク・活動

語彙マップ（以下、マップ）を作成した。「私」というテーマで自分について説明するマップを作成した。新しく辞書などで調べた語彙は、読み、意味、例文を記入し、語彙リストも作成した。

マップの作成は宿題とし、授業ではペアワークを2回、その後、作成したマップの発表を行った。ペアワークでは、話し手は自分が作成したマップについて説明し、聞き手は説明が足りない点、もっと知りたい点などを話し手にフィードバックし、それぞれマップの修正を行った。発表は、ポスター発表形式で行い、各自、自分のマップについて3、4回の発表を行った。

(3) 学生の声

漢字の知識は学生の出身が漢字圏か非漢字圏かによって差があり、非漢字圏の学生からは、新出漢字の数が多すぎて、覚えるのが大変だという声があった。

(4) 今後の課題

教科書で扱われている漢字や語彙だけでなく、対義語や関連語彙についても扱い、学生の語彙を増やしていけるよう、引き続き取り組んでいきたい。

5. 中上級日本語

5-1. 総合

(1) 授業の内容

全14週のうち12週目までは教科書をベースとした授業を行った。教科書は6課構成で、本文は主に異文化体験を振り返るエッセイである。1課に1～2つ、社会的テーマを論じた素材や、より硬い表現の読み物を追加した。追加教材はテレビ番組、新聞記事、ブログ、ニュースサイト、Webサイトの記事、N2レベルの読み物をもとに作成した。色々な媒体、文体に触れてもらうため、読み物と映像、論説文とエッセイ、書き言葉と話し言葉など、バリエーションが出るように選んだ。その他、ディスカッション、プレゼンテーション、グラフの説明、e-mail書き、N2の文法練習を行った。

(2) プロジェクトワーク・活動

コースの終わりの2週間で、プロジェクトワークを行った。活動の主な目的は、自身が持っている日本または日本人に対する疑問について、日本人にインタビューをして発表にまとめること、自国の文化との比較やグループでの議論を通じて社会的・文化的テーマへの理解を深めることである。プロジェクトワークの流れは表2のとおりである。

表2 「中上級日本語（総合）」コースのプロジェクトワーク

週	内容	成果物
～第12週	1. 日本・日本人への疑問点をあげる 2. グループのテーマを決める 3. 小プレゼンテーション	疑問点・関心事のリスト 小プレゼンテーションの原稿
第13週	4. 質問を決める アウトライン作成 5. インタビュー会（日本人学生を呼ぶ） 6. レポート作成と発表の準備	質問項目のリスト レポート（第1稿）
第14週	7. 発表会と振り返り	レポート（最終稿） スライド 振り返りシート

成果物は、レポートと口頭発表である。レポートは、文書作成ソフトを用い、指定の文体・構成に従って1200字程度にまとめた。発表はスライドを作成し、5分の発表と3分程度の質疑応答を行った。活動の評価方法は事前に学生に提示し、評価するポイントや割合について了解を得た。レポートは全員のを小冊子にまとめてPDFファイルで共有した。学生の選んだテーマは、「日本の若者の政治と社会問題への意識」「日本人の化粧についての考え方」「オタクっぽい外国人についてのイメージ」などであった。

終了後の振り返りでは、「レポートを書くのと聞いた話をまとめるのが大変だったが努力した」「自信を持って楽しい気持ちで発表すると、聞き手が集中できると思った」「発表の時に、レポー

トに書かなかった内容や映像資料を追加する工夫をした」「グループのメンバーと議論したのがよかった」等の意見が出た。熱心に取り組み、達成感や気づきを得た様子であった。

インタビューの質問項目を作る際、自分の見解に引っ張られず中立的な質問を立てるということに苦労した学生が多かった。今後は、どのような質問を用意するのがいいか、グループまたは全体で考える時間を設けたい。

(3) 学生の声

学習のニーズとして、「日常会話ができるようになりたい」「生活に関するニュースやトレンドを知りたい」「JLPT N2の練習をしたい」「緊張せず発表できるようになりたい」「漢字語彙を増やしたい」「日本語で開講されている講義を取りたいので聴解能力を伸ばしたい」などの声があった。授業の進度や難度は、大体の学生がちょうどいいと感じていたようだ。話すのが好きな学生が多く、クラスでのディスカッションを楽しんでいる様子であった。コース終了時の自己評価では、「どんな文法を使うか考えて話すようになった」「学期中努力したので自信が持てた」「自分の弱点に気づけた」といった声が聞かれた。

(4) 今後の課題

生教材を追加して色々なトピックや技能タスクを組み込むようにしているが、それらを学生にわかりやすい形で提示できていない。学生がコースで何をしたら振り返ることができるように、学期中に扱ったトピック、タスクを明示するようにしたい。また、日常会話で使われる文法、意見述べや説明で使える表現など、学生が必要な表現を効果的に学習できるように整理していきたい。

5-2. 語彙・漢字

(1) 授業の内容

授業では、最初に、前回の授業で学習した漢字の読み、書き、ディクテーションの復習クイズを実施した。そして、各課で扱う内容のポイントをまとめたパワーポイントを用い、例を挙げながら、読み方や意味を確認し、反義語や類義語、コロケーションなどについても整理した。練習問題はグループで取り組み、解答も各グループで分担し、正答はどれか、誤答はどこが間違っているのかを説明するようにした。

(2) プロジェクトワーク・活動

語彙マップ（以下、マップ）の作成を行った。マップのテーマは、各自、自分の興味があるテーマを自由に選んだ。学生が選んだテーマは、「映画」「芸術」「乗り物」などがあつた。新しく調べた語彙は、その語彙の漢字、読み、意味、例文をリストに記入し、語彙リストを作成した。

マップの作成は宿題とし、授業ではペアワークを2回、発表を行った。ペアワークでは、話し手は自分が作成したマップについて説明し、聞き手は説明が足りない点、間違っている点、わからなかった点などを話し手にフィードバックし、それぞれマップの修正を行った。そして、発表はポスター発表形式で行い、自分のマップについて3、4回発表を行った。

(3) 学生の声

授業で学習する漢字の数が多く、これまで知らなかった新出語彙もたくさんあるため、勉強が非常に大変だったという声があった。

(4) 今後の課題

1回の授業で学習する漢字、語彙の数が多く、また、詳しい説明も必要なため、授業時間内に予定していた内容をすべて終えられないことがあった。今後は、授業で扱う漢字や語彙の数を調整し、授業の進め方についても検討をしていきたい。

6. 上級入門日本語

6-1. 総合

(1) 授業の内容

テキストは「1. 女性の生き方」「2. 子どもと教育」「3. 若者の感性」「4. 仕事への意識」「5. 日本の外国人」の5課で構成されており、今期は1～4を扱った。各課を、漢字クイズ、語彙・文法や表現の練習、内容理解、活動（発表・インタビュー・作文等）の順に進めた。活動は、「言語知識の獲得だけを目的とするのではなく、獲得した言語知識を使って課題遂行型の活動を取り入れる」というクラス運営の考え方にに基づき、各課で学んだテーマに関連する情報や表現を「現実」と結び付け、運用させるというものである。例えば、テーマ1（女性の生き方）では、友人に「結婚や出産について・仕事と子育ての両立に関する考え」等についてインタビューし、それをレポートにまとめることを課した。また、学習意欲の喚起・継続を図るため、映像作品等、読解以外の資料も利用した。

(2) プロジェクトワーク・活動

目的は、テキストで学んだ内容やそれまでの経験を基に自らの問題意識を探り、問いを立てること、そして、その問いを日本語でのインタラクションを通じ明らかにすることである。その過程で、言語力および思考力を養成することを目指した。

① ゲストセッション（テキストベースの活動の一環）

テキストのテーマ3（若者の感性）の学習を踏まえ、1) 問題意識を明らかにし、問いを立てる、2) ペア、そして、グループで問題意識を共有し問いの最終案を作成する、3) 当日の進め方を検討する（役割・形式）・言語形式のインプット、4) ゲストセッションの実施、5) 内容や活動の振り返りをする（レポートを書く）、の順に進めた。学生のテーマは、「恋愛」「アニメ」「友人関係」「朝食の摂り方」「宗教観」「若者の自殺」「伝統文化観」「食生活」「ボランティア活動」であった。

② プロジェクトワーク（全42回の授業のうち13回）

13回のうち10回がグループによる調査関連の活動で、3回が料理教室に関わる活動である。両者の大テーマは「食」であった。

前者では、学生は「飲みニュケーション」「個食」「食のマナー」というテーマを選定した。流れは、1) クラス活動（関連資料の読み込み）、2) グループ活動（テーマや質問項目の設定）、3)

グループ間活動（他グループとの協働）、4) インタビューの実施とまとめ、5) 発表、6) レポートの作成、である。今回はクラスで「共通テーマ（食）」を設定し、「グループ活動」で進めることとした。共通テーマ、グループ活動としたことで、クラス全体へのインプットの量および質が確保でき、更に、意見の表明・説得・疑問の提示・賛否といったリアルな言語活動が頻繁に見られる結果となった。

後者の料理教室は、「日本の調味料（さしすせそ）を覚えて使う、日本の食卓を囲んでマナーを体感する、簡単・美味しい、おむすびを作る」ことを目標とし、日本人の食に対する考え方の一端を知るとともに、自身の食を見直そうというものであった。講師を招き、健康を考えた日本の食事の基本を知る活動とした。更に、かかった費用から食や活動に対するコスト意識を養ったり、講師へのお礼状を書くことで、手紙の書き方の練習をしたりした。

(3) 学生の声

学習内容として、「話す練習」「作文・レポートの練習」「文法」を希望する学生が多かった。授業前半のアンケートでは、作文やレポートに関するニーズが少なかったことから、それに充てる時間を前年度より減らしたが、最終的には練習したい事項として要望が出る結果となった。学期中、種々の授業を履修する中でレポートの必要性を実感したのかもしれない。

ゲストセッションは毎回日本人とじっくり話すことのできる貴重な機会となっているようで、満足感の高い活動である。また、プロジェクトワークも大変好評を得た。「調理実習は素晴らしい経験だった。日本人の料理の先生に教えてもらうのはかなり珍しいチャンスである。」「調理実習は本当によかった、色々な料理用の言葉を教えてもらって、また他の友達と料理するとき協力して、面白かった」という声が示す通り、日本料理をプロから学ぶ機会を得たことと、クラスメートとの協働作業が非常に記憶に残る活動となったことがわかる。

(4) 今後の課題

昨年度、そして、春学期と、言語知識の学習と言語知識の運用に関わる活動とを、どうバランスをとり、有機的に結び付けていくかを模索してきた。その結果、今後は次の二つに留意したい。まずは、テキストを活用し、文法や語彙を学習する時間を十分確保することである。もう一つは、上級レベルへとつなげるためにも、より自律的に自身の学習を内省し、行動する姿勢を養うことである。いずれも時間を要することなので、欲張らずに、目標を絞って丁寧に指導していくことが何より肝要だと考える。

6-2. 語彙・漢字

(1) 授業の内容

毎回、授業の最初にディクテーションと読みで構成された漢字の復習クイズを行った。クイズの出題範囲は、前回の授業で提出した漢字・語彙とし、毎週クイズを実施することで、前回の授業で学習した漢字の定着を図った。また、クイズの後に、その課のテーマに関連する諺を紹介し、学生の国の諺との比較を行った。

教科書は、「政治」、「経済」、「環境問題」などの分野で使われる漢字が整理された全16課で構成されていたが、限られた授業時間内では全ての課を取り上げることができないため、学生の専門や興味がある分野などを中心に、授業で扱う課を選択した。また、各課の漢字と語彙の数が非常に多いため、日常生活や大学の授業、新聞やニュースなどで目にする機会が多く、意味が分かって読めた方がよいと考えられる漢字を教師が選択し、プリントにまとめて授業を行った。

授業の最後には、その日に学んだ漢字の定着を図るための宿題を与えた。宿題の内容は課によって異なるが、学習したことばを文や文章の中で適切に使えるように、文を産出する課題を中心にし、その課で扱ったテーマに関連する作文なども課した。

(2) プロジェクトワーク・活動

特になし。

(3) 学生の声

一つの課で取り上げられている漢字の数が多く、授業時間内にできるだけ多くの練習問題を終わらせようとするあまり、授業の進捗が速くなりすぎることがあり、もう少しペースを落として授業を進めてほしいというコメントがあった。

(4) 今後の課題

教科書に取り上げられている漢字の数が多く、全ての練習問題を時間内に終わることが非常に困難であった。今後はこのレベルの学生に必須の漢字と語彙を選択し、その課に関連するテーマを取り上げた記事を読む練習にも時間を割けるようにしたい。

7. 漢字プロジェクト

2017年度春学期に、全レベル共通で「私の選んだ漢字」というプロジェクトを実施した。学生の漢字の習得を促進させ、また、漢字への興味を促すためには、自律的な学習が不可欠である。そこで、学生に興味を持った漢字を選んでもらい、なぜその漢字に興味を持ったのかを報告するプロジェクトを実施した。

プロジェクトでは、まず、教員が各クラスでプロジェクトの概要を説明し、学生には、指定された日までに、各自で漢字を選んでくるように指示した。その後、各クラスで、学生が選んだ漢字を筆ペンで書く練習を行った。筆ペンを使ったのは、書道の疑似体験をさせ、書字のバランスや筆順の合理性を実感させるためである。練習後、清書用シートに選んだ漢字を書かせ、最もきれいに書けたと思う漢字の一つ選ばせて、シートを回収した。最後に、その漢字を選んだ理由を書かせた。作文の長さは、レベルによって異なるが、50～200字程度であった。書かせた作文は担当教員が回収・添削した後、学生にプロジェクト・シートに書き直しをさせ、提出させた。

担当教員は、プロジェクト・シートの左側に、各学生から回収した漢字の清書を貼り付け、シートを完成させた。そして、全レベルの学生のプロジェクト・シートをレベル別に集約し、一つの冊子にまとめて、全学生に配布した。

今回は、筆ペンを使用したけど、今後は、書道で実施できるようにしたい。また、冊子の形での

成果報告だけでなく、口頭で説明する活動も有効であろう。更に、日本人学生にも参加してもらい、学生同士の交流を促すなどして、国際日本学部らしい活動として発展させていきたい。

8. オープン・キャンパスでの成果発表

2017年度は、初めての試みとして、ET日本語で実施した活動の報告やプロジェクトワークの成果物であるポスター、レポート集、写真などを中野オープン・キャンパス（以下、OC）で展示・公開した。

OC当日は、ET日本語の教員、ET日本語のサポートをしている大学院生と学部生、および、ET日本語を履修している学生が参加して、来場者への説明と対応を行った。特に、学生が自分たちの活動について紹介したことは、時間と労力をかけてプロジェクトに取り組んだり、成果物を作ったりしたことへの達成感が感じられ、来場者である高校生やその父兄とのやり取りにおいては、学習言語である日本語を使って実践的なコミュニケーションをするよい機会になったと言える。

OCでは、来場者に感想やコメントを書いてもらった。そこには、「みんな日本語がとても上手で、色々なことに挑戦していてすごいと思った」、「漢字プロジェクトの漢字を選んだ理由が人それぞれですごく面白かった」といった声が聞かれ、展示した成果物への評価がうかがえた。また、初めて留学生と接した高校生も多かったようで、「留学生と話したのは初めてで、新鮮で楽しかった」、「明治大学に来たら、こんな風に国際交流ができるのかなとわくわくした」といった感想も聞かれ、国際日本学部の国際性を実感してもらうよい機会になったと言える。

IV 到達レベルの分析

本章では、ET日本語の各レベル履修後に学生の日本語能力が設定した到達目標に到達していたかどうか、また、ET日本語のレベル設定は妥当であったかについて、JLPTの公式問題集を用いた模擬試験の結果とJLPT-CDsを用いた自己評価の分析を通して検証する。

1. JLPTの公式問題集を用いた模擬試験の結果の分析

1-1. 調査対象者と調査の実施時期

本調査の対象者は、2017年春学期にET日本語を履修した学生51名である。各レベルの学生の内訳は、入門7名、初級8名、中級入門8名、中級8名、中上級11名、上級入門9名である。調査は、2017年度春学期の学期末に授業の中で実施した。

1-2. 調査に用いたJLPTの科目と判定基準

JLPTにはN5～N1までの5レベルがあり、試験科目は、言語知識（文字・語彙・文法）、読解、聴解である。ET日本語の到達レベルがJLPTのレベルに符号していることを確認するためには、

全科目の受験が望ましい。しかし、時間の制約があるため、主に総合クラスで学習する「文法」と、漢字・語彙クラスで学習する「文字語彙」の問題を ET 日本語履修者に受験してもらい、その結果を分析の対象とした。本調査には、JLPT 公式問題集に掲載されている N5 ～ N2 レベルの問題を用いた。

JLPT では、各科目の基準点を超えており、更に、全体の約 60% の問題に正解できていれば、当該レベルに合格できる（詳細は、JLPT のホームページ参照）。そこで、本調査では、学生が JLPT の合格レベルに達したと判定する基準として、正答率の 60% を目安として設定した。例えば、入門では、到達レベルの目安は N5 合格程度であるため、本調査で用いた JLPT N5 の問題の 60% 以上に正解できていれば、N5 合格相当と判定した。また、中級入門と中上級は、それぞれ N3 と N2 半分終了程度が到達レベルの目安であるため、60% の半分である 30% 以上に正解できていれば、設定した到達レベル相当の日本語能力を有していると判定した。

1-3. 結果と考察

まず、表 3 に ET 日本語全レベルの記述統計を示す。「M」は平均、「SD」は標準偏差、「Min」は最低点、「Max」は最高点、「N」は各レベルの受験者数を表している。

表 3：JLPT 模擬試験の結果

レベル	JLPT(正答率)				
	M	SD	Min	Max	N
入門	77.343	10.907	67	93	7
初級	64.125	18.263	27	86	8
中級入門	54.325	24.110	16	83	8
中級	76.250	16.158	41	93	8
中上級	69.818	10.796	52	87	11
上級入門	73.778	14.255	46	91	9
合計	69.235	17.186	16	93	51

次に、表 4 に、目安として設定した JLPT の到達レベル、JLPT の文法と文字語彙の問題における平均正答率、および、目安として設定したレベルに到達した学生の割合をレベルごとに示す。なお、表中の（ ）内の値は、2016 年度春学期に本調査と同様に JLPT の問題を用いて行った調査の結果である。2016 年度に実施した調査の詳細については、柳澤他（2017）を参照されたい。

表4 ET日本語履修後の到達レベルの目安・平均正答率・目標レベル到達者の割合
()内の値は、2016年度春学期の結果

レベル	ET日本語履修後の到達レベルの目安	平均正答率	到達レベルの学生の割合
入門	N5合格 N5問題の60%以上に正解	77.3% (67.0%)	100% (75%)
初級	N4合格 N4問題の60%以上に正解	64.1% (65.0%)	75% (66%)
中級入門	N3半分終了 N3問題の30%以上に正解	54.3% (40.4%)	75% (55%)
中級	N3合格 N3問題の60%以上に正解	76.2% (69.0%)	88% (71%)
中上級	N2半分終了 N2問題の30%以上に正解	69.8% (67.6%)	100% (100%)
上級入門	N2合格 N2問題の60%以上に正解	73.8% (91.7%)	89% (100%)

以下に、表3と表4から観察された本調査の結果を報告する。

まず、入門の平均正答率は77.3%、目標レベルに到達していた学生の割合は100%であり、入門の学生全員がN5合格程度の日本語能力を獲得していたと言える。入門では、授業時間の多くが文法や語彙などの言語知識の学習に充てられていることが全員が目標レベルに到達していた理由の一つだと考えられる。また、今学期の入門の学生からは「もっと宿題がほしい」といった声が複数聞かれており、高い学習意欲を持って日本語学習に取り組んだこともJLPTの得点に反映されたと推測される。

初級の平均正答率は64.1%で、学生の75%が到達目標に達していた。このことから、初級の約7割がN4合格程度の日本語能力を獲得していたと言える。入門と同様に言語知識の学習が中心となる初級で、N4合格程度に到達できなかった学生がいた理由として、初級で扱った文法項目の少なさが挙げられる。初級後半では、敬語、受身、使役、使役受身などの言語形式が複雑で、語用論的知識も必要な文法項目が連続して提出される。これらの文法項目の定着には時間がかかり、学生への負荷も大きくなるため、2017年度春学期は、初級（総合）の教科書の最後の課を扱わず、その課の文法項目は中級入門で導入することにした。もともと初級（総合）の教科書がN4の文法や語彙を網羅しているわけでないことに加え、学習する文法項目が減ったことがJLPTの結果に影響を与えたと考えられる。また、2017年度から1コマ100分授業になったことに伴い、学生の集中力が続かなかったことも言語知識の定着が進まなかった要因の一つとなった可能性があるといえる。

中級入門の平均正答率は54.3%で、到達目標に達した学生の割合は75%であった。この結果から見ると、中級入門の7割以上の学生が到達レベルに達しているように見える。しかし、中級入門はET日本語全6レベルの中で最も履修者数が多く、日本語能力のレベル差も大きいクラス

であった。表3でも他のレベルよりSDが大きく、最低点の16点から最高点の83点まで得点の幅が非常に広がった。また、授業の難易度や進度について学生によって全く異なる意見が聞かれており、同じクラスの学生であっても、余裕を持って学習ができた者と、授業についていけただけで大変だった者が混在していたことがうかがえる。したがって、7割以上の学生が目標レベルに到達していたとはいえ、到達できなかった者は合格ラインよりかなり低い得点しか取れておらず、1つのクラスに日本語力の大きな差があったと考えられる。

中級の平均正答率は76.2%で、学生の88%が到達目標に達しており、9割近い学生がN3合格程度の日本語能力を獲得していた。中級になると、言語知識を受動的に学ぶだけでなく、課題遂行型の活動も取り入れられるようになる。そういった活動の中で学習した日本語を使って発表したり作文を書いたりしたことが言語知識の定着につながったと考えられる。また、中級の学生は、会話や敬語、レポートの書き方や発表の仕方など、様々な知識やスキルを身に付けたいという高い学習意欲を持って授業に臨んでいたことも多くの学生が目標レベルに到達できた理由の一つだと推測される。

中上級の平均正答率は69.8%で、全員が到達目標をクリアしていた。中上級の到達レベルの目安はN2の半分終了程度だが、学生の個別の点数を確認したところ、11名中9名の学生がN2合格ラインの60%以上の正答率であった。中上級では、新書やニュース映像などの生教材を1課に1～2つ程度追加して授業を進めたため、より難しい文法や語彙に触れる機会が増え、目標より高い日本語能力が獲得できたのではないかと考えられる。

上級入門の平均正答率は73.8%で、89%の学生が到達目標に達していたことから、約9割の学生がN2合格程度の日本語能力を獲得していたと考えられる。上級入門は、授業時間の3分の1をプロジェクトワークに費やし、授業も課題遂行型で進めているため、他のレベルより言語知識の学習に充てられている時間は短い。しかし、それでも多くの学生が目標レベルに到達できたのは、教科書などで学んだ言語知識をプロジェクトや各種課題などで実際に使って運用したことで定着が促進されたり、発表の準備やレポートの執筆において、自分が使いたい文法や表現、語彙などについて情報を集め、言語知識を増やしていったからではないかと考えられる。

最後に、JLPTの公式問題集の問題を用いて2016年度春学期に実施した調査（以下、調査①）と2017年度春学期に実施した本調査（以下、調査②）を比較しながら総合考察を述べる。表4に示した調査②の結果と（ ）に示した調査①の結果を見ると、いずれも目安として設定したJLPTの到達レベルが適切だったかどうかは、レベルによって異なることがうかがえる。

まず、入門と中級は、調査①で7割以上が目標レベルに達しており、調査②では、その割合が更に高くなっていることから、概ね設定したJLPTの到達レベルは適切だったといえる。入門と中級は、表4のSDの値も小さく、クラス内のレベル差が小さかったことが分かる。特に、日本語能力に差が見られたり、伸び悩みで苦勞する学生が増えたりする中級でも学期末のレベル差が小さく、約9割の学生が目標レベルに到達できていたのは、授業で教科書以外の生教材を取り入れるなどの工夫がされており、言語知識の学習とその知識を運用する活動がバランスよく行われ

た結果、日本語学習が促進されたためだと考えられる。

次に、中上級と上級入門は、調査①でも調査②でもほとんどの学生が目標レベルに到達していた。上級入門は、調査①と調査②で平均正答率に差が見られたが、いずれの調査においてもN2合格に必要な60%を十分に上回る正答率であったため、設定したJLPTの到達レベルは、ほぼ適切だったと言える。一方、中上級の平均正答率は、調査①も調査②も約70%で、履修者の7～8割がN2合格レベルに達していた。中上級の到達目標の目安は「N2半分終了程度(=正答率30%程度)」であるため、設定した目標レベルが低すぎた可能性がある。このことは中上級と上級入門のレベル差が小さいことも示唆している。特に、調査②の結果を見ると、中上級の平均正答率は69.8%、上級入門は73.8%で、その差は4%である。N3半分終了程度を目標としている中級入門とN3終了程度を目標としている中級では、平均正答率に21.9%の差があることと比べると、中上級と上級入門のレベル差が小さいことが分かる。上級入門の学生は、次学期にN1合格者が多くを占める上級に進級するが、上級入門と上級の間には日本語能力に大きなギャップがあり、上級入門から上級への移行がスムーズに進まないケースも散見されている。今後は、上級入門の到達目標をJLPT N1半分終了程度とし、授業内容も再検討した上で、上級とのギャップを埋めることに努めるとともに、中上級の目標レベルを実際の到達レベルに合わせてN2合格程度にすることも検討できる。

最後に、初級と中級入門は、調査②では7割以上が目標レベルに到達しているため、設定した目標レベルは、ある程度適切であったといえる。しかし、6レベル全体で見ると、他のレベルより平均正答率や目標レベルに到達している学生の割合が低いことが分かる。今後は、初級では、限られた時間の中でどれだけ言語知識の定着を図れるか、また、教科書で扱われていないN4レベルの文法や語彙をどのように補っていくかが課題となる。中級入門は、日本語能力の差が大きいクラスになることが多いため、どの学生の日本語能力や学習のペースに合わせて授業を進めるかは非常に難しいが、初級から中級への橋渡しとして、必要な知識やスキルが身に付けられる授業を実践していくことが重要であろう。

2. Can-do statements を用いた自己評価の分析

2-1. 調査対象者と調査の実施時期

本調査の対象者は、2017年春学期に「入門日本語」～「上級入門日本語」の6レベルの日本語科目を履修した学生60名である。各レベルの学生の内訳は、入門8名、初級8名、中級入門17名、中級8名、中上級10名、上級入門9名である。調査は、2017年度春学期の学期末に授業の中で実施した。

2-2. 調査に用いた Can-do statements (CDs)

本調査には、JLPT-CDsのCDsを用いた。JLPT-CDsは、JLPTの各レベルにおいて、「『このレベルの合格者は日本語を使ってどんなことができそうか』というイメージを作るための試験結

果の解釈の参考情報として提供するもの」(国際交流基金・日本国際教育支援協会 2012)であり、2010年と2011年のJLPT受験者の中から選ばれた約65,000人を対象としたアンケート調査の結果を基に作成されている。

このアンケート調査では、日本語を使って具体的にどのようなことができるのかを記述したCDsが4技能に分けて示されており、調査協力者は、そのCDsに対して「できる」「難しいがなんとかできる」「あまりできない」「できない」の4段階で自己評価した。そして、この自己評価に基づいて、識別力の高いCDsの選定やCDsの難易度の決定が行われ、現在、日本語能力試験のHPで公開されているJLPT-CDsが作成された。JLPT-CDsには、上述のアンケート調査の結果をもとに選定されたCDsが技能別に難易度順で示されている。CDsの項目数は、各技能で20項目、全体で80項目である。本調査では、この80項目のCDsを自己評価の質問として用いた。

JLPT-CDs開発の詳細については、国際交流基金・日本国際教育支援協会(2011)の中間報告(以下、中間報告)と、国際交流基金・日本国際教育支援協会(2012)の最終報告(以下、最終報告)を参照されたい。

2-3. 調査と分析の方法

本調査では、JLPT-CDsのCDsを用いて質問用紙を作成し、それぞれのCDsに対して、「Yes」「Yes, but with difficulty」「Not very well」「No」の4段階で自己評価をした。質問用紙の言語は、学生のレベルと希望に合わせて、英語版か日本語版を用いた。本調査で用いたCDsの具体的な記述については、JLPTのホームページ掲載のJLPT-CDsを参照されたい。

中間報告では、この4段階評価が「できる」は4、「難しいがなんとかできる」は3、「あまりできない」は2、「できない」は1と得点化されており、JLPTの各レベルの平均値が公開されている。そこで、本調査でも、この中間報告と同様に調査協力者の自己評価を得点化し、各レベルの学生の平均値を算出した。そして、平均値が中間報告とどの程度近似しているか分析した。なお、中間報告のCDsと本調査で用いた最終版のCDsは、一部記述内容が異なるため、記述内容が同じCDsのみの比較を行った。また、中間報告では、調査協力者の負担軽減のために、N1～N3向けのCDsを示したA版と、N3～N5向けのCDsを示したB版を用いて調査が行われており、難易度が低いCDsは、N4～N5合格者の平均値のみが、難易度が高いCDsは、N3～N1合格者の平均値のみが公開されている。本調査では、入門～上級入門の6レベルの学生が難易度が低いものから難易度が高いものまで全てのCDsについて自己評価をしたが、中間報告との比較は、中間報告でデータが公開されている項目についてのみ行った。

2-4. 結果と考察

以下の表5～表8に本調査と中間報告のCDs自己評価の平均値と、本調査の平均値から中間報告の平均値を引いた値を「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能に分けて示す。

表内の(1)～(80)の番号は、CDsの記述文の番号であり、各技能において、番号の数が大きく

なるほど CDs の難易度が高くなるように並べられている。

「入門」「初級」「中級入門」「中級」「中上級」「上級入門」の列の値は、本調査で実施した ET 日本語の各レベルの学生を対象とした CDs 自己評価の平均値であり、「N5」「N4」「N3」「N2」「N1」の列の値は、中間報告の CDs 自己評価の平均値である。そして、本調査の平均値から中間報告の平均値を引いた値が「入門 - N5」「初級 - N4」「中級入門 - N3」「中級 - N3」「中上級 - N2」「上級入門 - N2」「上級入門 - N1」の列に示されており、その値がマイナスのもの、すなわち、本調査の平均値が中間報告の平均値より低かった項目には網掛けがしてある。上級入門では、到達目標である N2 の平均値に加えて N1 の平均値との比較も行っている。これは、前述したように、上級入門終了者は、次学期に N1 合格者が多くを占める上級の日本語科目を履修するため、N1 合格者の自己評価と上級入門の学生の自己評価にどの程度の差があるかを参考情報として確認するためである。なお、「×」がついている項目は、本調査で用いた JLPT-CDs には記載されているが、中間報告の調査では用いられなかった CDs、空欄の部分は、中間報告では当該レベルの合格者に対して自己評価調査が行われなかった CDs である。

表5に「聞く」の自己評価の平均値、および、本調査と中間報告の差を示す。まず、全体的な傾向について述べる。「入門 - N5」～「上級入門 - N1」の列の太字の値を見ると、値がマイナスで網掛けになっている項目が少なく、全体的に中間報告より本調査の自己評価の方が高いことが分かる。「聞く」は、後述する残りの3技能の結果と比べても差の値がマイナスになった項目が少なく、本調査では、日本語を「聞く」力については、特に自己評価が高かったことがうかがえる。

これには日本語を学ぶ環境が影響していると考えられる。中間報告の調査協力者の地域別合格者数の割合は、日本国内が約1割で、残りの9割は海外であった。このことから、中間報告の調査協力者の多くは、海外の JFL (Japanese as a foreign language) 環境で日本語を学ぶ学生であったと推測される。一方、本調査の調査協力者は、日本の JSL (Japanese as a second language) 環境で日本語を学んでいる学生である。JFL 環境では、日本語を聞く機会は教室内などに限定されるが、JSL 環境では、授業以外でも日常的に日本語を聞くことになる。そのため、様々な場面で日本語を聞いて理解できたという経験の積み重ねによって自信が付き、「聞く」の自己評価が高くなったと考えられる。

次に、レベルに注目すると、差の値がマイナスなのは、「中級入門 - N3」と「上級入門 - N1」だけであった。中級入門の到達目標レベルは N3 半分程度であるため、JSL 環境で日本語を学んでいるとは言え、N3 合格相当の自己評価に到達できないのは妥当な結果であったといえる。特に差が大きかったのは、-0.67 の「(10) I can generally understand TV dramas and movies in standard Japanese」であった。これは、JFL 環境では日本語を聞く機会が限られるため、ドラマや映画などで日本語を聞く学生が多かったからだと考えられる。一方、JSL 環境では、ドラマや映画を見なくても日本語を聞く機会が日常的にあり、寮の自室にテレビがない、日本の映画の料金は高いといった事情もあって、あまりドラマや映画を見なかった可能性がある。この環境に

よるドラマや映画の視聴頻度・量の違いが自己評価の差に表れていたものと推測される。

上級入門は、目標レベルである N2 合格者の平均値との比較では、差の値がマイナスになっている項目はなかったが、N1 合格者との比較では、マイナスになっている項目が複数見られた。これは、上級入門を終了した学生の「聞く」力が、N1 合格者相当までは到達していないことを示唆するものであり、JLPT 公式問題集を用いた調査の考察で、上級入門と上級の間には日本語能力にギャップがあると述べた点が CDs 調査においても確認されたものと考えられる。

レベル別の考察として、「中上級 - N2」の結果にも触れておきたい。中上級の到達目標は N2 半分程度終了だが、中間報告との比較では、N2 合格者の平均値と比較しても差の値がマイナスになった項目は一つもなく、N2 合格相当、あるいは、それ以上の自己評価をしていたことが分かる。この結果は、前述の JLPT 公式問題集を用いた調査において、中上級の学生が N2 合格相当の言語知識を獲得していたことと一致していると言える。

表 5：「聞く」の自己評価の平均値

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
入門	3.88	3.25	3.75	3.50	3.00	3.50	2.63	3.13	2.88	2.00	2.38	1.88	1.88	2.38	2.13	2.29	2.38	2.25	2.00	1.88
N5	×	×	3.24	3.15	2.92	2.86														
入門-N5	×	×	0.51	0.35	0.08	0.64														
初級	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.88	3.50	3.38	3.63	2.75	3.13	3.50	3.00	3.13	3.00	2.50	2.88	2.50	2.25	1.88
N4	×	×	3.40	3.30	3.16	3.06														
初級-N4	×	×	0.60	0.70	0.84	0.82														
中級入門	3.82	3.88	3.88	3.82	3.71	3.59	3.50	3.24	3.24	2.47	3.00	4.00	2.76	2.94	2.71	2.50	2.59	2.44	2.29	2.06
N3							3.20	3.02	2.96	3.14	3.02	2.95	2.65	2.70	2.73	2.25	2.74	2.40	2.41	2.04
中級入門-N3							0.30	0.22	0.28	-0.67	-0.02	1.05	0.11	0.24	-0.02	0.25	-0.15	0.04	-0.12	0.02
中級	4.00	4.00	4.00	3.75	4.00	3.88	3.75	3.75	3.88	3.25	3.50	3.50	3.00	3.38	3.13	3.13	3.25	3.38	3.13	3.13
N3							3.20	3.02	2.96	3.14	3.02	2.95	2.65	2.70	2.73	2.25	2.74	2.40	2.41	2.04
中級-N3							0.55	0.73	0.92	0.11	0.48	0.55	0.35	0.68	0.40	0.88	0.51	0.98	0.72	1.09
中上級	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.90	3.80	4.00	3.90	3.70	3.80	3.56	3.78	3.44	3.40	3.44	3.40	3.44	3.40	2.90
N2							3.53	3.34	3.32	3.38	3.29	3.30	2.92	2.94	2.95	2.47	2.97	2.65	2.72	2.33
中上級-N2							0.27	0.66	0.58	0.32	0.51	0.26	0.86	0.50	0.45	0.97	0.43	0.79	0.68	0.57
上級入門	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.89	3.89	3.56	3.67	3.78	3.56	3.56	3.67	3.33	3.44	3.78	3.44	3.78	2.78
N2							3.53	3.34	3.32	3.38	3.29	3.30	2.92	2.94	2.95	2.47	2.97	2.65	2.72	2.33
上級入門-N2							0.36	0.55	0.24	0.29	0.49	0.26	0.64	0.73	0.38	0.97	0.81	0.79	1.06	0.45
上級入門	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.89	3.89	3.56	3.67	3.78	3.56	3.56	3.67	3.33	3.44	3.78	3.44	3.78	2.78
N1							3.77	3.65	3.65	3.73	3.68	3.63	3.35	3.35	3.37	2.99	3.39	3.17	3.22	2.92
上級入門-N1							0.12	0.24	-0.09	-0.06	0.10	-0.07	0.21	0.32	-0.04	0.45	0.39	0.27	0.56	-0.14

次に、表 6 に「読む」の調査結果を示す。「読む」も「聞く」と同様に、全体的な傾向として、本調査の平均値の方が中間報告の平均値より高かった。これも本調査の対象者が JSL 環境で日本語を学んでおり、日本語で書かれた様々なものを読む機会が JFL 環境より多いためだと考えられる。しかし、「聞く」よりは、中間報告との差の値がマイナスになっている項目数やレベルが多く、自己評価が低くなっていることがうかがえる。これは、「聞く」は学生が意識しなくても、学内外で様々な内容、スタイル、長さ、難易度の日本語が日常的に耳に入ってくるのに対し、「読む」は、授業の中で読解を扱ったり、学生自身が意識的に新聞や小説、エッセイなどに手を伸ばさなければ、読む活動につながらない。学生の「読む」活動の経験値が量・質ともに「聞く」活動より少なかったことが、「読む」の自己評価が低かった要因ではないだろうか。

レベル別に見ると、「聞く」と同様に、「中級入門－N3」と「上級入門－N1」では、平均値の差がマイナスになっている項目が多かった。これは、「聞く」と同様に、当該レベルの到達目標レベルより高いレベルと比較をしているためだと言える。この結果から、「読む」については、中級入門終了者はN3合格者レベルに、上級入門終了者はN1合格レベルに到達していないことがうかがえる。一方で、中上級は、目標レベルより高いN2合格者レベルにほぼ到達していると言える。「読む」においても中上級の学生のレベルが到達目標として設定したレベルより高い可能性が示唆された。

表6:「読む」の自己評価の平均値

	(21)	(22)	(23)	(24)	(25)	(26)	(27)	(28)	(29)	(30)	(31)	(32)	(33)	(34)	(35)	(36)	(37)	(38)	(39)	(40)
入門	3.50	3.63	3.50	2.75	3.13	3.13	3.00	2.50	1.71	2.71	2.14	2.57	2.00	1.67	2.00	2.29	1.43	1.29	1.29	1.43
N5	3.22	×	3.21	3.19	×	3.07	×	2.83												
入門－N5	0.28	×	0.29	-0.44	×	0.06	×	-0.33												
初級	3.63	3.88	3.63	3.50	3.88	3.63	3.50	3.38	3.00	3.14	2.38	2.75	2.25	2.25	2.38	2.13	2.00	1.50	1.63	1.88
N4	3.36	×	3.41	3.29	×	3.21	×	3.11												
初級－N4	0.27	×	0.22	0.21	×	0.42	×	0.27												
中級入門	3.53	3.71	3.59	3.35	3.47	3.35	3.41	2.88	2.94	3.00	2.35	2.53	2.41	2.25	2.18	2.35	2.13	1.94	1.94	1.94
N3							3.11		3.13	3.02	2.60	2.82	2.74	2.22	2.61	2.56	2.51	2.36	2.14	2.18
中級入門－N3							0.30		-0.19	-0.02	-0.25	-0.29	-0.33	0.03	-0.43	-0.21	-0.39	-0.42	-0.20	-0.24
中級	3.88	4.00	3.88	3.88	4.00	3.88	3.88	3.88	3.63	3.63	3.13	3.50	3.63	3.38	2.88	2.88	3.00	2.75	2.50	2.50
N3							3.11		3.13	3.02	2.60	2.82	2.74	2.22	2.61	2.56	2.51	2.36	2.14	2.18
中級－N3							0.77		0.50	0.61	0.53	0.68	0.89	1.16	0.27	0.32	0.49	0.39	0.36	0.32
中上級	3.80	4.00	4.00	4.00	4.00	3.78	4.00	4.00	3.80	3.80	3.30	3.40	3.30	3.22	3.70	3.33	3.00	2.60	2.67	2.67
N2							3.43		3.39	3.32	2.91	3.21	3.11	2.58	2.85	2.94	2.91	2.80	2.56	2.57
中上級－N2							0.57		0.41	0.48	0.39	0.19	0.19	0.64	0.85	0.39	0.09	-0.20	0.11	0.10
上級入門	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.89	3.78	3.78	3.56	3.67	3.63	3.56	3.22	3.33	2.78	2.67	2.67
N2							3.43		3.39	3.32	2.91	3.21	3.11	2.58	2.85	2.94	2.91	2.80	2.56	2.57
上級入門－N2							0.57		0.50	0.46	0.87	0.35	0.56	1.05	0.71	0.28	0.42	-0.02	0.11	0.10
上級入門	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.89	3.78	3.78	3.56	3.67	3.63	3.56	3.22	3.33	2.78	2.67	2.67
N1							3.75		3.73	3.70	3.42	3.63	3.58	3.18	3.25	3.42	3.44	3.37	3.15	3.17
上級入門－N1							0.25		0.16	0.08	0.36	-0.07	0.09	0.45	0.31	-0.20	-0.11	-0.59	-0.48	-0.50

次に、表7に「話す」の調査結果を示す。「話す」の自己評価も「聞く」「読む」と同様に、全体的には本調査の平均値の方が中間報告の平均値より高い傾向にあった。しかし、「話す」では、「中級入門－N3」と「上級入門－N1」だけでなく、「入門－N5」でも差の値がマイナスの項目が見られた。これは、入門の学生が日本語で話す機会が少ないためだと考えられる。「話す」のCDsの中で、唯一差がマイナスにならなかった(41)「I can introduce myself and answer simple questions about myself」は、授業の中で自己紹介をしたり教員の質問に答えたりしているため、自己評価が高くなっている。しかし、教室外の実生活で入門の学生が日本語で話す機会は限られており、日本語で話してみたが通じなかったという経験もしていることが予想されるため、JFL環境で学んでいる学生より日本語で話している機会は多かったとしても、本調査で高い自己評価をつける自信はまだなかったものと考えられる。入門では、言語知識のインプットが中心となるため、日本語で話したり書いたりするアウトプットの練習を十分に行うのは時間的に難しい。しかし、入門レベルの学生の「話す」力を目標レベル相当まで引き上げるためには、授業中に話す活動をより多く取り入れるなどの工夫が必要だろう。

表7:「話す」の自己評価の平均値

	(41)	(42)	(43)	(44)	(45)	(46)	(47)	(48)	(49)	(50)	(51)	(52)	(53)	(54)	(55)	(56)	(57)	(58)	(59)	(60)
入門	3.75	3.25	3.13	2.88	2.75	2.50	2.38	2.38	2.25	2.25	2.00	1.75	2.00	1.63	1.50	1.38	1.63	1.50	1.50	1.38
N5	3.49	3.31	3.34	3.03	2.91															
入門-N5	0.26	-0.06	-0.22	-0.16	-0.16															
初級	4.00	4.00	4.00	3.88	3.88	3.88	3.75	3.71	3.25	3.13	2.63	2.13	3.13	2.75	1.63	2.13	2.75	1.75	1.63	1.63
N4	3.55	3.48	3.48	3.16	3.19															
初級-N4	0.45	0.52	0.52	0.72	0.69															
中級入門	3.76	3.71	3.65	3.59	3.41	3.59	3.35	3.29	3.35	3.18	3.12	2.53	3.12	2.82	2.71	2.47	2.65	2.41	2.41	2.18
N3						3.40	3.35	3.21	3.23	3.21	3.00	2.58	2.95	2.72	2.71	2.76	2.75	2.40	2.41	2.34
中級入門-N3						0.19	0.00	0.08	0.12	-0.03	0.12	-0.05	0.17	0.10	0.00	-0.29	-0.10	0.01	0.00	-0.16
中級	4.00	4.00	3.88	3.88	3.88	3.88	4.00	3.75	3.63	3.50	3.63	3.25	3.50	3.50	3.50	3.38	3.13	3.13	3.25	3.13
N3						3.40	3.35	3.21	3.23	3.21	3.00	2.58	2.95	2.72	2.71	2.76	2.75	2.40	2.41	2.34
中級-N3						0.48	0.65	0.54	0.40	0.29	0.63	0.67	0.55	0.78	0.79	0.76	0.38	0.73	0.84	0.79
中上級	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.80	3.80	3.90	3.60	3.90	3.80	3.60	3.40	3.50	3.10	3.40	3.33
N2						3.58	3.58	3.42	3.41	3.34	3.30	2.98	3.27	2.99	3.01	3.12	2.88	2.73	2.74	2.65
中上級-N2						0.42	0.42	0.58	0.39	0.46	0.60	0.62	0.63	0.81	0.59	0.28	0.62	0.37	0.66	0.68
上級入門	4.00	4.00	4.00	3.89	4.00	4.00	3.89	3.56	3.89	3.33	3.56	3.56	3.89	3.22	3.22	3.33	3.33	2.89	2.67	2.89
N2						3.58	3.58	3.42	3.41	3.34	3.30	2.98	3.27	2.99	3.01	3.12	2.88	2.73	2.74	2.65
上級入門-N2						0.42	0.31	0.14	0.48	-0.01	0.26	0.58	0.62	0.23	0.21	0.21	0.45	0.16	-0.07	0.24
上級入門	4.00	4.00	4.00	3.89	4.00	4.00	3.89	3.56	3.89	3.33	3.56	3.56	3.89	3.22	3.22	3.33	3.33	2.89	2.67	2.89
N1						3.82	3.82	3.72	3.71	3.61	3.63	3.46	3.64	3.36	3.45	3.55	3.28	3.27	3.28	3.15
上級入門-N1						0.18	0.07	-0.16	0.18	-0.28	-0.07	0.10	0.25	-0.14	-0.23	-0.22	0.05	-0.38	-0.61	-0.26

最後に、表8に「書く」の調査結果を示す。「書く」では、「話す」と類似した傾向が観察され、「中級入門-N3」と「上級入門-N1」に加えて「入門-N5」でも差の値がマイナスになる項目が見られた。これは、入門の学生が日本語で何かを書く機会が少ないためと考えられる。「話す」も「書く」も産出系の活動ではあるが、「話す」機会はJSL環境であれば、多少はあるはずである。一方、「書く」は、宿題や課題で短文を書いたり、学生自身が意識して手紙やメッセージなどを書かなければ、日本語を書く活動にはつながらない。入門でアウトプットの練習を十分行うことは難しく、日本語能力的にも書けることは限られているが、宿題などで定期的に日本語を書く練習をすることで、「書く」力を目標レベルに近づけることが可能になるのではないだろうか。

「中級入門-N3」と「上級入門-N1」では、難易度が高いCDsは、ほとんどがマイナスの値であった。中級入門をN3合格レベルに、上級入門をN1合格レベルに近づけるためには、様々なタイプやテーマの文章をできるだけたくさん書く練習をして、「書く」力をつけていくことが重要だといえるだろう。

表8:「書く」の自己評価の平均値

	(61)	(62)	(63)	(64)	(65)	(66)	(67)	(68)	(69)	(70)	(71)	(72)	(73)	(74)	(75)	(76)	(77)	(78)	(79)	(80)
入門	3.63	3.75	2.88	2.88	2.88	2.71	2.00	2.25	2.38	2.00	1.88	1.63	1.63	1.50	1.88	1.75	1.50	1.50	1.50	1.38
N5	×	3.14	3.08	2.88	2.77	2.86	2.73	2.52												
入門-N5	×	0.61	-0.21	0.00	0.11	-0.15	-0.73	-0.27												
初級	4.00	4.00	4.00	3.75	3.88	3.88	3.50	3.50	3.25	3.00	3.13	2.88	2.38	2.13	2.50	2.63	2.00	1.75	1.75	2.25
N4	×	3.26	3.23	3.13	2.90	3.12	2.95	2.88												
初級-N4	×	0.74	0.77	0.62	0.98	0.76	0.55	0.62												
中級入門	3.65	3.71	3.65	3.65	3.59	3.59	3.24	3.06	3.24	3.00	3.00	2.82	2.35	2.47	2.47	2.24	2.12	2.29	2.12	2.12
N3									3.07	2.97	2.99	2.60	2.61	2.54	2.54	2.51	2.40	2.35	2.39	2.13
中級入門-N3									0.17	0.03	0.01	0.22	-0.26	-0.07	-0.07	-0.27	-0.28	-0.06	-0.27	-0.01
中級	4.00	4.00	3.88	4.00	4.00	3.88	3.75	3.88	4.00	3.75	3.75	3.50	3.38	3.00	3.38	2.88	2.75	3.29	2.75	2.63
N3									3.07	2.97	2.99	2.60	2.61	2.54	2.54	2.51	2.40	2.35	2.39	2.13
中級-N3									0.93	0.78	0.76	0.90	0.77	0.46	0.84	0.37	0.35	0.94	0.36	0.50
中上級	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.70	3.80	3.70	3.10	3.40	3.90	3.60	3.30	3.40	3.22	3.33
N2									3.30	3.24	3.27	2.91	2.96	2.88	2.77	2.71	2.73	2.65	2.71	2.44
中上級-N2									0.70	0.46	0.53	0.79	0.14	0.52	1.13	0.89	0.57	0.75	0.51	0.89
上級入門	4.00	4.00	3.89	4.00	4.00	4.00	3.78	3.78	3.78	3.56	3.89	3.56	3.22	3.00	3.22	3.00	3.00	2.67	2.67	2.89
N2									3.30	3.24	3.27	2.91	2.96	2.88	2.77	2.71	2.73	2.65	2.71	2.44
上級入門-N2									0.48	0.32	0.62	0.65	0.26	0.12	0.45	0.29	0.27	0.02	-0.04	0.45
上級入門	4.00	4.00	3.89	4.00	4.00	4.00	3.78	3.78	3.78	3.56	3.89	3.56	3.22	3.00	3.22	3.00	3.00	2.67	2.67	2.89
N1									3.59	3.54	3.61	3.37	3.40	3.35	3.20	3.10	3.22	3.14	3.22	2.98
上級入門-N1									0.19	0.02	0.28	0.19	-0.18	-0.35	0.02	-0.10	-0.22	-0.47	-0.55	-0.09

JLPTの公式問題集を用いた模擬試験の結果とJLPT-CDsを用いた自己評価の分析を通して、ET日本語の各レベル履修後に学生の日本語能力が設定した到達目標に到達したかどうか、ET日本語のレベルや到達目標の設定は妥当だったかについて少しずつ明らかになってきた。更に、到達目標の調整・変更、授業の内容や進め方などについてもいくつかの示唆が得られたため、今後も継続して調査を行い、データの蓄積と分析を通して、設定したレベル・到達目標の妥当性について検証していきたい。

V 成果と今後の課題

2017年度春学期のET日本語の取り組みを通して得られた成果と、見えてきた今後の課題について以下にまとめる。

1. ET日本語の取り組みを通して得られた成果

まず、ET日本語で行った各種活動やプロジェクトワークの成果を中野OCで展示・公開したことが挙げられる。ET日本語では、これまでも各クラスで様々な活動やプロジェクトを行ってきたが、その成果を公表する機会は少なかった。しかし、今年度は、OCでET日本語で実施した様々な活動やプロジェクトの成果を報告できた。

次に、オンラインのプレイズメント・テスト(以下、OPT)を開発したことが挙げられる。2016年度秋学期までは、プレイズメント・テスト(以下、プレテ)の筆記試験(文字語彙・文法・読解の3科目)は、問題をすべて印刷して紙媒体で実施していた。しかし、ET日本語履修者が増加傾向にある中で、採点作業の長時間化やマンパワー不足、採点ミスなどの人的ミスが課題と

して顕在化してきた。そこで、各種作業の省力化、人的ミスの回避、および、テスト分析の効率化を目的として、2016年度秋学期からOPTの開発に着手し、2017年度春学期に初回のOPTを実施した。OPTは無事に実施され、採点結果も紙媒体のプレテよりかなり早く出力できるようになった。今後もET日本語の履修者は増えていくことが予想されるため、OPTを開発できたことは大きな成果であったといえる。OPTの詳細や紙媒体のプレテとOPTの比較については、別稿の小森(2018)を参照されたい。

最後に、言語知識の強化とJLPTの試験勉強に特化した「日本語能力試験対策」という科目を新たに立ち上げたことが挙げられる。ET日本語は、言語知識の獲得だけでなく、各種活動やプロジェクトワークにも時間を費やしている。しかし、学生の中には、JLPTなどの資格試験に合格することを日本語学習の目標にしている者もあり、そういった学生のニーズを満たすことは、既存のET日本語科目では難しかった。「日本語能力試験対策」を開講したことで、ET日本語ではカバーしきれない言語知識の学習や試験対策が可能となり、ET日本語と「日本語能力試験対策」をあわせて履修することで、言語知識とその実践的な運用能力をバランスよく身に付けることができるようになった。

2. 今後の課題

今後の課題として、まず、中野OCでのET日本語の成果物展示を学生主体で進めることが挙げられる。2017年度春学期は、初めての試みだったため、教員主導で成果物の収集や管理をし、展示や装飾の仕方なども決めていったが、来年度以降は、各種活動への取り組みや成果物の作成からET日本語ブースでの成果報告までを一連のプロジェクトとして授業に組み込み、学生に主体的に関ってもらいたい。そうすることで、学生はより大きな達成感を得ることができ、ET日本語の目標の一つである課題遂行型の日本語学習も実現できると考えられる。

次に、OPTの微調整と新たな課題の追加が挙げられる。OPTは、2017年度春学期と秋学期に2回実施され、その中で微調整が必要な項目が明らかになってきたため、それらの調整を進め、プレテの質を向上させたい。また、現在のOPTは、「文字語彙」「文法」「読解」の3科目で構成されているが、今後は、「作文」や「聴解」などの導入も検討し、より精度の高いOPTの開発を目指したい。

そして、JLPT対策として新たに立ち上げた「日本語能力試験対策」のレベルやコマ数を増やすことも課題である。2017年度は、JLPT N2合格を目指す「日本語能力試験対策(中級)」を春学期に、JLPT N1合格を目指す「日本語能力試験対策(上級)」を秋学期に開講した。しかし、これでは春学期にN1合格を目指す学生と、秋学期にN2合格を目指す学生は、履修できる科目がなくなってしまう。そこで、「日本語能力試験対策(中級)」と「日本語能力試験対策(上級)」を各学期に1コマずつ開講したい。また、可能であれば、JLPT N3の合格を目指す「日本語能力試験対策(初中級)」も設置し、更に多くの学生のニーズに応えられる体制を整えていきたい。

最後に、ET日本語のレベル設定や到達目標の再検討が挙げられる。本稿で実施した到達レベ

ルの分析の結果、例えば、中上級の到達目標レベルは、「N2 半分終了程度」であったが、今回実施した調査の結果、実際には、N2 合格程度の日本語力があり、設定した到達目標と実際の日本語力に乖離が見られた。また、上級入門は、到達目標レベルを「N2 合格程度」と設定しているが、次の学期に N1 取得者が中心となる上級に進級することを考えると、もう少し目標レベルを高く設定して、上級入門から上級への移行がスムーズに行えるようにした方が学生の負担も軽減できると考えられる。このように、ET 日本語のレベル設定や到達目標については、再検討が必要な部分も見受けられるため、今後も継続して調査を行い、その妥当性について検証していきたい。

VI おわりに

ET 日本語が 6 レベルで運営されるようになってから 1 年半が経ち、様々な知見や経験も少しずつ蓄積されつつある。しかし、学期によって学生のレベルや 1 クラスの人数、クラスの雰囲気などは全く異なるため、それぞれの科目を担当する教員は、日々試行錯誤をしながら授業に取り組んでいる。その結果、ET 日本語は、この 1 年半で様々な点において充実してきており、OPT 開発などに代表されるいくつかの成果も残してきた。しかし、同時に改善すべき課題も明らかになってきているため、これからもコース全体や個々の授業の改善や改良に取り組み、より質の高い充実した日本語教育を実践・提供していけるよう努力を続けていきたい。

謝辞

ET 日本語コースの運営にあたっては、以下の方々に多くのご支援とご協力をいただいた。学生の家庭訪問を受け入れてくださった児玉和子様、日本食ワークショップでご指導いただいた植木千津様、風呂敷ワークショップを実施してくださった学生相談室の小暮富美恵様、坂本朋子様、ゲストセッションにご協力・ご参加くださった明治大学国際日本学部の学生ボランティアの皆さま、そして、各種事務手続きでお世話になった中野教務事務室の許貞恩様、羽田紘大様、片爪美穂様、松本英久様、内田則之様、平光萌子様、深味岳人様に心よりお礼を申し上げる。

参考文献

- 門倉正美・筒井洋一・三宅和子 編 (2006) 『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』 ひつじ書房。
加納千恵子・清水百合・谷部弘子・石井恵理子 (2015) 『(新版) BASIC KANJI BOOK VOL.2 - 基本漢字 500 -』 凡人社。
加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智 (2011) 『INTERMEDIATE KANJI BOOK VOL.1 漢字 1000PLUS (改訂第 3 版)』 凡人社。
加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智・平形祐紀子 (2014) 『INTERMEDIATE KANJI BOOK VOL.2 漢字 1000PLUS (改訂第 4 版)』 凡人社。
国際交流基金 (2012) 『日本語能力試験 公式問題集 N2』 凡人社。
国際交流基金 (2012) 『日本語能力試験 公式問題集 N3』 凡人社。
国際交流基金 (2012) 『日本語能力試験 公式問題集 N4』 凡人社。

- 国際交流基金 (2012) 『日本語能力試験 公式問題集 N5』 凡人社.
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2012) 『日本語能力試験 Can-do 自己評価調査レポート<最終報告> (2011年6月発表)』 < https://www.jlpt.jp/about/pdf/cds_final_report.pdf > (2017年9月25日閲覧).
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2011) 『日本語能力試験 Can-do 自己評価調査レポート<中間報告> (2011年6月発表)』 < https://www.jlpt.jp/about/pdf/cds_interim_report.pdf > (2017年9月25日閲覧).
- 小森和子 (2018 印刷中) 「日本語オンライン・プレイスメント・テストの分析 - 紙版テストとの比較を通して-」 『明治大学国際日本学研究』 10-1.
- 小森和子・柳澤絵美 (2016) 「日本語プログラムの妥当性検証の試み - 日本語能力試験 Can-do 自己評価リストを利用して-」 『明治大学国際日本学研究』 8-1, pp. 93-118.
- 小森和子・柳澤絵美・安高紀子 (2017) 「日本語プレイスメント・テストの開発と問題項目の分析 - 国際日本学部の ET 日本語科目における試み-」 『明治大学国際日本学研究』 9-1, pp. 31-61.
- 近藤安月子・丸山千歌・有吉英心子 (2013) 『中級日本語教科書 わたしの見つけた日本』 東京大学出版会.
- 近藤安月子・丸山千歌 (2008) 『中・上級日本語教科書 日本への招待 テキスト (第2版)』 東京大学出版会.
- 日本語能力試験ホームページ < <http://www.jlpt.jp> > (2017年9月25日閲覧).
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011) 『初級日本語 げんき I (第2版)』 The Japan Times.
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011) 『初級日本語 げんき II (第2版)』 The Japan Times.
- 平井悦子・三輪さち子 (2016) 『中級へ行こう 日本語の文型と表現 55 (第2版)』 スリーエーネットワーク.
- 平井悦子・三輪さち子 (2007) 『中級を学ぼう 日本語の文型と表現 56 中級前期』 スリーエーネットワーク.
- 柳澤絵美・渡辺晴世・岩元隆一・菊池富美子・奥原淳子・小森和子 (2017) 「ET 日本語コースにおける中級レベルの開設と今後の展望 - 国際日本学部における取組-」 『明治大学国際日本学研究』 9-1, pp. 121-154.
- Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press.